

武蔵大学生涯講座 ZOOM 編

古代史探訪

=小さな疑問が歴史観を変える=

第二回 三角縁神獣鏡を考える

(邪馬台国近畿説の大きな柱となっている三角縁神獣鏡=卑弥呼の鏡説の真偽に迫ります。)

一、古代における鏡の意義

古代において、王の仕事は太陽観察により農作業のタイミングを知り、神のご神託として民に知らしめることであり、この神事に不可欠の神具が太陽の化身としての鏡であった。

二、三角縁神獣鏡の意匠

内区は中国の神獣鏡から外区は画像鏡を参考にして作られ、中国鏡には存在しない非吉祥句や傘松模様が散見される。一定の規格の下で特殊な体制により大量生産されたもの。

三、三角縁神獣鏡は卑弥呼の鏡か

①、出土枚数への疑問

イ、卑弥呼が下賜された鏡は 100 枚なのに、国内には 500 枚を超える出土がある。
ロ、中国に出土例が無い。

②、鏡に刻まれた銘への疑問

三角縁神獣鏡には中国鏡にはあり得ない銘が散見される。

③、魏の年号が刻まれている鏡への疑問

イ、錆で溶けてしまったり、欠けていて読めない文字を強引に魏の年号として読んでいる。
ロ、魏の年号に存在しない年号の刻まれている鏡がある。

④、鋸歯文の加工痕についての考察。

加工痕は鏡ごとでなく古墳毎に共通している。

⑤、鉛同位体が語るもの。

鉛同位体比は古墳毎に近似値。

四、三角縁神獣鏡とは何か

①、日本書紀が語る崇神の時代。

崇神は征服した地区の王に銅鐸に代わる神具を配布しなければならなかった。

②、奈良に在った鏡作作業集団。

鏡作神社は九州勢と出雲勢の融和に不可欠の存在であった。

③、本物とレプリカ。

結論